

第43回

人と大地に 魅せられて



北海道に移住して約10年。東京出身の私にとって、この地の暮らしは驚きの連続。出会った人々、食や自然に魅了された数々の体験について取り上げます。今回は、知床斜里にあるコミュニティカフェ「ヒミツキチこひつじ」をご紹介します。

ヒミツキチこひつじを運営する仲間たち。左から中山よしこさん、運営を手伝っている荒井千晶さん、小島扶佐子さん、小和田久美子さん。週3回オープン。@kohitsuji_shariで営業日が確認できる。

ゆるやかにつながる、家族のかたちを探って

それぞれのやりたいことを集めて

北海道の東、オホーツク海に面した海岸線が広がる斜里町。その中心地となる知床斜里駅から歩いて数分の裏通りに「ヒミツキチこひつじ」はある。築七十年ほどの住宅を改修したこの場所は、カフェであり、図書室でもあり、ギャラリーでもある。料理のメニューは、パンやうどん・甘味、おむすびが並ぶ日も。多種多様なものが集まった空間だが、それぞれがしっくり調和して居心地がいい。

この場所が生まれるきっかけをつくったのは、「メーカーベーカーリー」というパン屋を斜里の山あいでも営んでいた小和田久美子さん。二〇一八年にいったんお店を閉め、イベントなどでパン販売を続けながら、新たな店舗を探していたところだった。あるときここを見つけて一目惚れしたという。

「ブックカフェのような、ゆつくりできる空間をつくりたいと思いました」店を一緒にやっていたと声をかけたのは旧知の仲だった、斜里在住の中山よしこさん。中山さんは、ライター・編集者であり、イベントがあると古書の出店も行っていた。小和田さんと同

東京都出身。美術の専門出版社で雑誌・書籍の編集に約20年携わり、2011年に北海道へ移住。

2018年に「森の出版社 ミチクル」設立。北の自然や人をテーマにした本を刊行している。イラストエッセイ『山を買う』など。

じく、販売の拠点がほしいと思っていたそうだが、この古家に対し「薄暗い印象があつて」、最初は乗り気でなかったという。しかし、小和田さんと大工の友人が中心になって一年がかりで改修を進める中で、天井の板が抜かれ空間全体が明るくなり、イメージが変わっていったと振り返る。

このほか以前に「メーメーペーカリー」でランチを提供していた小島扶佐子さんがうどんと甘味を提供することになり、おにぎりとスープの移動販売を始めようとしていた下山由季乃さんも参加することになった。現在、週に三日、販売できるメンバーが集まってお店を開けている。

これからの暮らし方を探って

今回、この場所のメンバーの中で小和田さんと中山さんに詳しく話を聞いた。二人が知り合ったのは十七年前。当時、小和田さんは新得町の羊牧場で働いていた。斜里生まれの中山さんは、札幌の専門学校に進学し、その後編集プロダクションや広告代理店などで働いていたが、一度、故郷でリセットしたいと思いUターン。

そんな折に二人は出会い、互に行き来をするようになった。その後、小和田さんが斜里に移住し、やがて町内のパン工房で働き独立した。

二人の会話を聞いていると、友だちという言葉だけでは言い尽くせないものがあるように感じられた。小和田さんがカフェをやりたいと言った時、中山さんは躊躇もあつたがイ



上が小和田さんが焼く薪窯のパン。下がうどん・甘味処「美つ八」のメニュー。名前の由来は、改修中にここがまるで「秘密基地」のようだったことと、「迷えるこひつじ」がここにやってきてほしいと思ったことからという。

エスと答えた。また中山さんが「ヒミツキチこひつじ」という名前を思いついた時、小和田さんは、言いにくい名前だなと思いつながら、その名を受け入れた。

時には言いたいことを言葉にして気まづくなることもあるというが、ここぞという時は互いを尊重する。運命共同体のような関係だと感じた。

「私は近くに親戚や家族がいないのでこの場所のようなコミュニティがないと生きていけないと思っていました。困ったときに助けてほしいと言え

る人間関係があるといいなと感じています」と小和田さん。夢は高齢になったときにみんなで暮らせるシェアハウスをつくることだという。

「どうやって暮らしていくのがテーマです。キッチンシェアしたり、訪れた人と食や文化をシェアしたり。これからの暮らし方を見据えた雛形のような場所になればと思っています」と中山さんも語る。中山さんにとって、「斜里の商店街は自分の巣。そしてここが自分の家」のような感覚があるという。

オープンから一年半が経つ。イベントスペースとして使いたいという要望があつたり、アーティストが二階のスペースに滞在して制作を行ったりも。関わった人の数だけ可能性は広がっている。こうした様々な取り組みから、ゆるやかに人々はつながり、信頼関係を育んでいる。既存の家族という枠を超えて、人々が結びつくことができる、そんな可能性をこの場所に感じた。